佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
〒840－0041 佐賀市城内1丁目15－23 TEL. 0952－24－3947 FAX. 0952－25－7006

佐賀新聞 2009(平成21)年5月30日(土) 県内文化欄 文化時評

美術

気概漲るフジタの群像図

野中 耕介

二〇〇六年以降、洋画家・藤田嗣治（レオナール・フジタ）の展覧会が、まるで堰を切ったように各地で開催されている。長らく本格的な回顧がなされていなかったこともあって、展覧会はいずれも盛況。先日の福岡市美術館での「レオナール・フジタ展」（二～四月）も同様であった。

会場は藤田の代名詞である「素晴らしき乳白色の地」をそなえた甘美な作品群を陶然と見つめる人々であふれ返っており、肩と肩を触れ合わせながらの鑑賞であった。

今回の展示の目玉は八十年ぶりの日本公開となる「構図」と、日本初公開「争闘」計四点の大作群像図（福計十二点、フランス・エソンヌ県議会蔵）で、制作当時の作品評にあるように、その巨大さゆえ藤田独自の線描、モデリングの繊細さが見えがたい印象も受けるが、西洋美術の伝統に対し、大上段に構えた挑みかかる気概が漲っているかのごとき仕上がりである。

藤田は美校時代、教授の黒田清輝に強く反発したといわれる。しかし、藤田は黒田が推進した「構想画」の理念を高い次元で実現できた、数少ない教え子の一人であったのではなかったろうか。

この「構図」や「争闘」連作を皮切りに、以降、藤田は多くの大作群像図を手がけることになる。大作の群像を描くことは高度な力量を要するうえ、依頼主の存在が不可欠であるが、藤田はその両方を得て、身の底から湧出する力のすべてを、少しも憑することなく画面に叩きつけている。藤田のその並外れたバイタリティーはどこから来ていたのだろうか。

藤田といえば、かの有名な「戦争記録画」のことを思い浮かべる人も多いと思う。しかし今回の展覧会では、それらには全くといってよいほど触れられていない。フランス帰化後の名を冠した展覧会の趣旨からすれば、それらは異質なのだろうが、しかしあえていうと、やはり、戦争記録画も含めたところで藤田の画業を一望し、その魂に触れてみたかったというのが私の本音である。

藤田は表現に向かう昂奮を誰よりも敏感に感じ、尊んでいた。自身の内に降りた美の神に従い、描くことだけに生涯を捧げた根っからの「絵描き」であった。

それをより深く知るために、私たちは善悪や倫理といったものとはまた違った視線をもって、あらためて藤田の戦争記録画―かれにとっての〝究極〟の群像図―を見つめてみる必要があるのではないか。

（県立美術館学芸員）

県内文化

文化時評 2009